

特集 研究がおもしろい！ Part 5

大学院生の研究最前線

新井田智幸

今回の特集は、5回目となる院生会員の研究紹介企画である。4人の院生会員による研究論文と、院生の研究交流企画の報告を通じて、院生の研究活動への取り組みの一端を紹介する。

色摩論文は、ヘーゲルの市民社会論を現代の新自由主義批判の文脈にも応用することを展望したものである。柴田論文は、フランシス・ベーコンの思想を再検討し、ベーコンが自然の支配というときの意味を吟味したものである。丸岡論文は、不均一的な物理現象を数学的に記述するときの本質的な意味を問う哲学的な提起をしている。松山論文は、確定的でもカオス的でもない中間的な現象を扱うことへの挑戦を述べたものである。いわゆる文系と理系の研究二つずつの紹介であるが、どれも哲学的な問いにまで掘り下げた視角をもち、それぞれの分野で新たな境地を切り開こうとする野心的な研究だといえよう。

今回はこれらの各論文に、若手研究者からコメントを寄せてもらった。コメンテーターはそれぞれ分野の専門家というわけではないが、著者と研究交流をともにすることで、各論文に結実したような問題関心を理解している研究者である。短いコメントであるが、研究仲間ならではの愛情がにじみでたものとなっている。

最後に、院生の研究交流の具体的な企画報告として、東京支部で例年行われている「春の学校」について紹介する。ゼミ発表や学会発表とは違うJSAの企画での研究発表にどんな独自の意義があるのかが述べられている。今回紹介した論文もこのような研究交流を踏まえて生まれてきたものと解してほしい。

ここで院生、若手研究者にとってのJSAの

意義について述べておきたい。JSAには多様な役割があるだろうが、大学院生にとって最も重要なものは、研究交流をし、研究を進めるうえでの発想やエネルギーを得ることにある。JSAには日常的な研究環境にはないような刺激があるからだ。

分野を横断して院生が集まっていることが一つの理由であるが、それだけではない。異なる分野の間で議論を通じて互いに刺激を与えられるのは、どんな分野の研究であっても科学的真理の追究という営みは共通しているという認識を互いに持ち合わせているからに他ならない。それぞれ対象や方法が違って同じ目標を共有しているという想いが、ここでは感じられるのだ。幅広い学問に触れられるというメリットだけではなく、研究報告をするにあたっては、専門外の聞き手に理解してもらえるような発表を準備することで、自分の研究をより広い視点から見直すことができる。こうして培われる、壮大な科学のなかに自分の研究が位置付いているという意識は、ともすれば忘れがちな、狭い専門を超えた研究の意義を確認するための拠り所となる。専門家の教養の衰退や倫理の低下が問題とされる今日、こうした幅広い科学に触れた研究者を輩出することは社会的にも有意義であるに違いない。

JSAには次代を担う院生、若手研究者がたくさんおり、各地でこうした研究交流を通じて成長している。今回の特集を通じてその息づかいを感じてもらおうとともに、さらなる若手会員の充実のために、そして会員拡大に役立ててもらえれば幸いである。

(にいだ・ともゆき：岐阜大学，経済思想)